

中国唯識における円測の位相

——三性説を中心に——

吉 村 誠

序言

円測（六一三—六九六）は、六二七年（二五歳）に新羅から入唐して法常・僧弁に学び、六四五年（三三歳）に玄奘（六〇二—六六四）が帰国するとその門下に投じた。したがって、円測が学んだ唯識思想は、初めは撰論学派のものであり、後には唯識学派のものである。その経歴は、円測の思想や著作にさまざまな影響を及ぼしている。例えば、円測は著作の中で「真諦三蔵」と「大唐三蔵（玄奘）」を対比して叙述したり、玄奘訳のみならず真諦訳の著作を数多く引用したりする。

このことから、円測の思想の特徴は新旧の学説の折衷ないし調和にあるという評価や、玄奘所伝の五姓各別説を否定し真諦訳に依拠した一切皆成論者であるという評価がなされてきた。しかし、円測の著作の内容が詳しく研究されるようになると、円測が玄奘訳とその思想に忠実であり、五姓各別

説を肯定していたことが明らかとなってきた。円測の思想の再評価の動きは、近年特に高まりをみせている。^③

筆者は、玄奘の思想を研究する立場から円測の著作の一部を読み解いてきた。その結果、円測は撰論学派から唯識学派に転向した人物であり、その著作は新旧の学説の違いを明示して玄奘所伝の唯識思想を顕示するもので、なかには円測独自の解釈や基への影響も見られる、と考えるようになった。小稿では、これを検証するために、円測の『般若心経賛』の空の解釈をとりあげ、撰論学派と唯識学派の『般若心経』の注釈と比較することにした。この考察を通じて、中国唯識における円測の立場が明らかとなるであろう。

一、慧浄『般若心経疏』の三性説

玄奘が『般若心経』を翻訳したのは貞観二三年（六四九）

五月二四日である。³⁾これに対する現存最古の注釈は、慧淨（五七八—六五三？）の『般若心経疏』である。⁴⁾慧淨は波羅頗迦羅蜜多羅（Prabhakarmitra 五六五—六三三）の『大乘莊嚴経論』の翻訳で筆受を務め、その注釈三〇巻を著して波頗に「東方の菩薩」と称された人物である。⁵⁾その空に対する注釈は次のようである。

色は形色也。堅湿煖動、即色蘊也。空即虚通。為無自性故。言「色不異空、空不異色」者、為二乘人滅色取空、不知空是自心、心外見有空境。見境心礙。礙即名為色。故言「空不異色」。「色即是空」者、菩薩了達色性自空。非色滅空。非は無色名空。非是因觀故空。非心尽故空。非是拆法故空。猶如兔角龜毛、本無体性。故言「色即是空」。「空即是色」者、若心外見空、即還被空礙。故言「空即是色」。空不自空、因色故有空。色不自色、因空故有色。以空知有色、以色知有空。離空無別色、離色無別空。諸仏或時説色、或時説無色。諸法実相中、無色無非色。空亦如此。

色は是れ形色なり。堅湿煖動、即ち色蘊なり。空は即ち虚通なり。無自性なるが故に。「色不異空、空不異色」と言ふは、二乗の人は色を滅して空を取るが為に、空は是れ自心なりと知らず、心外に空境有りと見る。境に心の礙を見るなり。礙を即ち名けて色と為す。故に「空不異色」と言ふ。「色即是空」といふは、菩薩は色性自ら

空なりと了達す。色滅の空に非ず。是の無色を空と名づくるに非ず。是の觀に因るが故に空なるに非ず。心尽くるが故に空なるに非ず。是の方を拆するが故に空なるに非ず。猶ほ兔角龜毛の如く、本より体性無し。故に「色即是空」と言ふ。「空即是色」とは、若し心外に空を見れば、即ち還た空に礙げらる。故に「空即是色」と言ふ。空は自ら空ならず、色に因るが故に空有り。色は自ら色ならず、空に因るが故に色有り。空を以て色有るを知り、色を以て空有りと知る。空を離れて別の色無く、色を離れて別の空無し。諸仏或る時は色を説き、或る時は無色を説く。諸法の実相の中には、色無く非色無し。空も亦た此の如し。

ここには、空は「虚通」「無自性」であることや、「色性は自ずから空」であり「本より体性無し」であると説かれるのみで、三性説など唯識思想による解釈は見られない。ただし、この続きには次のようである。

『華嚴経』二云。「心能採尽色。採尽色非心。離心無尽色。離尽色無心」。一切相待並准此。譬如有兩目俱昧、在路独行。其道兩辺、俱有深坑。其人不見、或落道東、或落道西。当欲入坑、不見正路、路逢一人、引向中道。一切衆生、亦復如是。為諸煩惱、蔽於慧目、妄執空執色。聞説「色不異空」、即執空是有。為説「空不異色」、即執色

是真。為説「色即是空」、還執空為実有。為説「空即是色」、還起色執不除。必竟逐語尋声、為此遣心未尽。今以四重、翻覆心境、方始窮源。譬如有人兩目俱昧者、凡夫二乘慧眼未開、不見中道是。兩畔深坑者、執斷執常、執空執色、常起有無二辺悪見等是。路逢一人者、即諸仏如来是。教避深坑者、離二辺悪見、為説菩提正路者是。至於空之与色、皆是自心所変。了知心境不二。故言「色不異空」。

『華嚴經』に云ふ。「心は能く色を採尽す。色を採尽するは心に非ず。心を離れて色を尽くすこと無し。色を尽くすことを離れて心無し」と。一切相待にして並な此れに准ず。譬へば兩目俱に昧なるもの有りて、路に在りて独り行くが如し。其の道の兩辺に、俱に深坑有り。其の人見えず、或は道の東に落ち、或は道の西に落つ。当に坑に入らんと欲し、正しき路を見ざるに、路に一人に逢ひて、引かれて中道に向かふ。一切衆生も、亦復た是の如し。諸もろの煩惱の為に、慧目を蔽はれ、妄りに空を執り色を執る。「色不異空」と説くを聞き、即ち空は是れ有なりと執す。「空不異色」と説くが為に、即ち色は是れ真なりと執す。「色即是空」と説くが為に、還た執して空を实有と為す。「空即是色」と説くが為に、還た色を起こし執して除かず。必竟語を逐ひ声を尋ね、此れが為に心を遣ること未だ尽つくさず。今四重を以て、心境を翻

覆し、方に始めて源を窮む。譬えば人の兩目俱に昧なる者有るが如きは、凡夫二乗の慧眼未だ開かず、中道を見ざる是れなり。兩畔の深坑は、断に執し常に執し、空に執し色に執し、常に有無二辺を起こす悪見等是れなり。路に一人に逢ふは、即ち諸仏如来是れなり。深坑を避くるを教ふるは、二辺の悪見を離れ、為に菩提正路を説く者は是れなり。空の色と与なるに至るは、皆な是れ自心の所変なり。心境不二を了知す。故に「色不異空」と言ふ。

すなわち、『華嚴經』には「心」「色」が「相待」であることと説かれているが、盲者が中道を歩めないように衆生は「空」「有」の執着に陥りがちであるため、ここでは四重の句によつて「心境を翻覆」する。「空の色と与なるに至るは、皆な是れ自心の所変」であり、「心境の不二なる」を知ることが「色不異空」である、という。ここでは、空・色ないし空・有の關係が、心・色ないし心・境の關係に置き換えられ、兩者を相待して「心境不二」とみることが経意である、と述べられている。

「自心所変」という表現には唯識思想が現れているが、「心境不二」という文句も唯識の三性説を背景にした表現であると考えられる。慧淨は別の箇所でも、次のように述べている。

「觀」者、慧也。能見人法二空之理者、即是有無齊遣。薬病両忘、不縁於相。摂境帰心、心境俱泯、無有二相。

由如虚空、見此理体、名為「自在」⁽¹⁰⁾。

「観」とは、慧なり。能く人法二空の理を見る者は、即ち是れ有無齊しく遣る。薬病両つながら忘れ、相を縁ぜず。境を摂して心に帰し、心境俱に泯ずれば、二相有る無し。虚空の如く、此の理体を見るに由るを、名づけて「自在」と為す。

すなわち、「観」とは「慧」のことであり、「有無齊しく遣り」心境俱に泯びて、人法二空の「理体」が現われることから「自在」である、という。空がそのまま真如であるわけではなく、人法二空によって現われるのが真如であるというのは、唯識学派にも見られる二空所顕の真如という考えである。しかし、人法二空を心・境の捨遣であるとする解釈や、心・境の捨遣によって真如が現われるという解釈は、唯識学派のものではない。これは撰論学派における三性説の解釈の一つである。

撰論学派の三性説では、遍計所執性(分別性)・依他起性(依他性)・円成実性(真实性)のうち、遍計所執性が識に妄執された「境」、依他起性が境を妄執する「識」であるとして、両者が共に滅びることが円成実性であるという解釈が行われた。これを境識俱泯説という。慧浄の「心境不二」や「心境俱泯」には、この撰論学派の三性説の解釈が反映されているといえるだろう。慧浄はまた別の箇所、次のようにも述べ

ている。

意識同縁五塵、亦向内縁、名遍計所執性。七識依六識分別、向内縁以成得塵、執受成種子、重入八識。一向内縁名縁、名依他起性。八識体是如来藏。根本是真。亦名円成実性。

意識の同じく五塵を縁じ、亦た内縁に向かふを、遍計所執性と名づく。七識は六識に依りて分別し、内縁に向かひて以て塵を得るを成じ、執受して種子を成じ、重ねて八識に入る。一向に内縁するを縁と名づけ、依他起性と名づく。八識の体は是れ如来藏なり。根本は是れ真なり。亦た円成実性と名づく。

ここでは、第六識が遍計所執性、第七識が依他起性、第八識が円成実性に比定され、第八識の体は如来藏であるとされている。三性の訳語は玄奘訳であるが、三性に八識を配当したり、第八識の体を如来藏であると解釈したりするのは、撰論学派の所説である。慧浄は先の引用文で「心境俱泯」によって現われる「理体」が「自在」であると述べていたが、それは境識俱泯によって自ずから在る如来藏が現われるという意味なのである。

このように、慧浄の『般若心経疏』の空の解釈は、撰論学派の三性説を背景としたものである。撰論学派では唯識説を如来藏思想によって解釈する傾向が顕著であったが、慧浄の

解釈も同様である。慧浄の『般若心経疏』は、新來の唯識説の用語や教理を用いるものの、内容から見ると撰論学派の唯識説よる注釈といえるであらう。

二、円測『般若心経賛』の三性説

1、清弁と護法の三性説の解釈

次に、円測の『般若心経賛』の三性説を検討する。『般若心経賛』の成立時期は不明であるが、『大般若経』への言及があることからそれが訳出された龍朔三年（六六三）を上限とし、円測の卒年である万歳通天元年（六九六年）を下限とする。その空に対する注釈は、次のようである。

「照見五蘊皆空」者、弁其智用、用有二種。一者自利、二者利他。此明観空、即是自利。将釈此文、先叙諸観、後依前観釈此经文。言諸観者、若夫仏法甚深、本唯一味、学者未悟、乃成異説。是故世尊『仏地経』説。…中略…親光釈曰。「千年已前、仏法一味、過千年後、空有乖諍」。「照見五蘊皆空」とは、其の智用を弁ずれば、用に二種有り。一には自利。二には利他なり。此れ空を観するを明かさば、即ち是れ自利なり。將に此の文を釈するに、先に諸観を叙べ、後に前の観に依りて此の経文を釈す。諸観と言うは、若し夫れ仏法甚深なれば、本は唯だ一味

なるも、学者未だ悟らざれば、乃ち異説を成す。是の故に世尊『仏地経』に説く。…中略…親光釈して曰く。「千年已前、仏法一味なるも、千年を過ぎて後、空有乖諍す」と。

円測は、智のはたらきには自利と利他の二種があるが、ここには自利の空観が説かれているとして、先ず複数の空観をあげ、次にそれに基づいて経文を解釈する、という。そして、複数の空観が生じた原因が、仏滅後一千年に興った空有の論争にあることを、『仏地経』と『仏地経論』親光釈を引用して説明する。空有の論争の概略は、次のようであるという。

仏滅没已一千年後、南印度界健至國中、有二菩薩一時出世。一者清弁。二者護法。為令有情悟入仏法、立空有宗、共成仏意。清弁菩薩、執空撥有、令除有執。護法菩薩、立有撥空、令除空執。…中略…故今略述二種観門。A 一者清弁、依諸『般若』及龍猛宗、立一観門。謂歴法遣相観空門、立一切法皆悉是空無生無滅本來寂靜自性涅槃。…中略…B 二者護法、依『深密』等及弥勒宗、立一観門。謂在識遮境弁空観門、立一切法通有及無。遍計所執情有理無。依他起性因縁故有。円成実性理有非無。⁽¹⁶⁾ 仏滅没し已りて一千年後、南印度界健至國の中に、二菩薩の一時に出世する有り。一には清弁、二には護法なり。有情をして悟り仏法に入れしめんが為に、空有の宗を立

て、共に仏意を成ず。清弁菩薩、空に執して有を撥し、有執を除かしむ。護法菩薩、有を立てて空を撥し、空執を除かしむ。…中略…故に今略述するに、二種の観門あり。A一には清弁、諸もろの『般若』及び龍猛の宗に依り、一観門を立つ。謂く法を歴し相を遣る観空門にして、一切法は皆な悉く是れ空・無生・無滅・本来寂靜・自性涅槃なりと立つ。…中略…B二には護法、『深密』等及び弥勒の宗に依り、一観門を立つ。謂く識在りて境を遮して空観門を弁じ、一切法は有と及び無とに通ずと立つ。遍計所執は情有にして理無なり。依他起性は因縁なるが故に有なり。円成実性は理有にして無に非ず。

すなわち、仏滅後一千年に清弁 (Bhāvika) と護法 (Dharmapala) が同時に出世し、空有の論争を繰り広げた。清弁は空を説いて有執を除き、護法は有を説いて空執を除こうとした。そのため、大略して二種の空観がある。A 清弁は『般若経』や竜樹の教えにより、法相をすべて捨遣する空観を立て、一切法がみな空であるとした。これに対し、B 護法は『解深密経』と弥勒の教えにより、識において境を捨てる空観を立て、一切法は有と無に通じるとした。それは、遍計所執は妄情において有であるが真理としては無であり、依他起性は因縁であるから仮有であり、円成実性は真理として有であるというものである、という。

このように、円測は空観を、A 清弁の一切法は空であるとする空観と、B 護法の一切法は空有に通じるとみる空観とに大別し、これに基づいて『般若心経』の本文を次のように解釈する。

言「五蘊」者、所謂色蘊受想行識。…中略…如是五蘊有其三種。一者遍計所執五蘊、情有理無。二者依他起性五蘊、因縁仮有。三者円成実性五蘊、真実理有。…中略…言「皆空」者、顕所証理。即前二空。依此諸空、分成兩釈。A 依清弁宗、自有二解。一曰、三中、遣前二性、非円成実。故『中論』曰、「因縁所生法、是即説為空。」一曰、三性五蘊皆空。故『掌珍』曰、「無為無有、実不起似空華」。準此応知、円成亦遣。B 依護法宗、三種蘊中、但遣所執、以弁空性。所引理教、具如上説。

「五蘊」と言ふは、所謂る色蘊と受と想と行と識（との蘊）なり。…中略…是の如き五蘊に其の三種有り。一には遍計所執の五蘊にして、情有にして理無なり。二には依他起性の五蘊にして、因縁にして仮有なり。三には円成実性の五蘊にして、真実にして理有なり。…中略…「皆空」と言ふは、所証の理を顕はす。即ち前の二空なり。此の諸空に依りて、分ちて兩釈を成ず。A 清弁の宗に依らば、自ら二解有り。一に曰く、三の中、前の二性を遣るも、円成実（を遣る）には非ず。故に『中論』に曰く、

「因縁所生の法、是れ即ち説きて空と為す」と。一に曰く、三性の五蘊皆な空なり。故に『掌珍』に曰く、「無為は有ること無く、実には起こらざること空華に似る」と。此れに準じて応に知るべし、円成も亦た遣ると。B護法の宗に依らば、三種の蘊の中、但だ所執のみを遣りて、以て空性を弁ず。引く所の理教は、具さには上に説くが如し。

すなわち、「五蘊」には三性説により三種ある。遍計所執性の五蘊は妄情において有であるが真理としては無であり、依他起性の五蘊は因縁であるから仮有であり、円成実性の五蘊は真理として有である。「皆空」とは二空所顕の真如であるが、これに大別して二つの解釈がある。A清弁によれば、三性の五蘊のうち遍計所執性と依他起性の五蘊は捨遣するが円成実性の五蘊は捨遣しないという解釈と、三性の五蘊をすべて捨遣するという解釈の二つがある。これに対し、B護法によれば、三性の五蘊のうち遍計所執性のみを捨遣するという解釈である、という。

ここで、円測は三性説の複数の解釈をあげている。A清弁に帰せられる第一の解釈は、遍計所執性・依他起性は捨遣されるが円成実性は捨遣されないというもの。第二の解釈は、遍計所執性・依他起性・円成実性のすべてが捨遣されるというもの。B護法に帰せられる解釈は、遍計所執性は捨遣され

るが依他起性・円成実性は捨遣されないというものである。A清弁とB護法の解釈を大別するポイントは、依他起性を捨遣するか否かというところにある。

A清弁の第一の解釈は、撰論学派の境識俱泯の三性説と構造が同じである。清弁の第二の解釈は、円測が他の著作において真諦 (Paramārtha 四九九―五六九) の説としてあげているものであり、やはり撰論学派で行われたものである。一方、B護法の解釈は、唯識学派の依拠する『成唯識論』の三性説であり、依他起性に捨遣されるべき染分のほかに捨遣されない浄分があるとするものである。これを二分依他說という。¹⁹⁾

2、三性説に対する円測の見解

ここで問題となるのは、円測がA清弁とB護法の解釈をただ併記しているだけなのか、それともどちらか一方を正義としているのか、ということである。

A清弁とB護法の三性説の解釈の違いについては、円測の『仁王経疏』²⁰⁾にも述べられている。ここでは、清弁と護法の三性説の違いが、真諦と玄奘の三性説の違いとして対比されている。また、三性説の解釈は、次のように三つに細分されるという。

若広分別、如『広百論』第十卷中、有三師釈。一瑜伽学徒、立依他有。二清弁菩薩、説依他空。三護法菩薩、双

破両執。故彼論中云。…中略…問。護法宗、如『成唯識』、不遣依他。如何此中、説依他起非空非有。解云。護法正言、如『成唯識』、不遣依他、而今欲成聖天論意。故立中道、而不相違。一云。護法正宗、立中道義、而『成唯識』、述瑜伽宗。故亦不違²¹。

若し広く分別すれば、『広百論』第十卷の中に、三師の釈有るが如し。一には瑜伽学徒、依他有りと立つ。二には清弁菩薩、依他空なりと説く。三には護法菩薩、両執を双破す。故に彼の論の中に云く。…中略…問ふ。護法の宗は、『成唯識』の如く、依他を遣らず。如何が此の中に、依他起は非空非有なりと説くや。解して云く。護法正に言く、『成唯識』の如く、依他を遣らざるも、而も今は聖天の論の意を成ぜんと欲す。故に中道を立てて、而も相違せず。一に云く。護法の正宗は、中道の義を立て、而して『成唯識』は、瑜伽の宗を述ぶ。故に亦た違せず。すなわち、『広百論釈論』によれば三性説の解釈には三つあり、依他起性について、瑜伽行派は有を説き、清弁は空を説き、護法は非空非有の中道を説いた、という。後文では、護法の『成唯識論』では依他起性を捨遣しないとは説かれてはいるが、どうして非空非有が説かれているといえるのか、という問いが立てられる。これに対し、護法は『成唯識論』のように依他起性は有であると説いたが、ここでは聖

天 (Aryadeva) の論意を明らかにしようとして非空非有中道を説いているという答へと、護法の正義は非空非有中道を立てることにあるが、『成唯識論』では瑜伽行派の説をあげているので両者は矛盾しないという答えとが述べられている。しかし、『広百論釈論』の本文には三者の名称は見られない。したがって、ここには円測による読み込みがあるといえるだろう。ここで円測が護法の立場を支持し、『成唯識論』の説について弁明していることは明らかである。

円測は、護法や玄奘の三性説の解釈と同様に、遍計所執性は捨遣するが依他起性・円成実性は捨遣しないと考えていた。そのことは、『解深密経疏』の次の箇所示されている。

依他起相上、遍計所執相無執、以為縁故、円成実相而可了知。…中略…有云。無執者、無能執依他及所執分別。故言無執。故『仏性論』云。「問曰。真实性縁何因得成。答曰。由分別依他極無所有。故得顯現」。解云。訳家謬也。遣依他起、違自所宗『瑜伽』等故。

依他起相の上に、遍計所執相の執無く、以て縁と為すが故に、円成実相は了知すべし。…中略…有るもの云く。執無しとは、能く依他と及び所執の分別とに執する無しと。故に執無しと言ふ。故に『仏性論』に云く。「問ふて曰く。真实性は何の因に縁りて成ずるを得るや。答へて曰く。分別と依他と極めて無所有なるに由る。故に顯

現するを得」と。解して云く。訳家の謬りなり。依他起を遣るは、自らの所宗の『瑜伽』等と違するが故に。

これは、依他起相において遍計所執相の執着がないことが円成実相である、という本文に対する注釈である。ある者は、執着がないというのは能執の依他性と所執の分別性がないこととであり、『仏性論』に「分別性と依他性が無になると真実性が現われる」と説かれているのがその証拠である、という。これに対し、円測は、これは訳者である真諦の誤りであり、依他起性を捨遣するのは、瑜伽行派の宗義である『瑜伽論』などの説に違反する、と述べている。『解深密経疏』には同様の批判が他にも見られる。

このように、円測は三性説の解釈において明確に唯識学派の二分依他説の立場をとっている。したがって、『般若心経賛』のA清弁とB護法の解釈は、ただ併記されているのではなく、後者が支持されていると見るべきである。このことは、慧浄の『般若心経疏』の空の解釈ないし撰論学派の境識俱泯説を、円測が批判しているということを意味している。円測が『解深密経疏』において、撰論学派の境識俱泯説の根拠である真諦説を否定しているのは、その明確な証拠といえるであろう。

三、基『般若心経幽賛』の三性説

次に、基（六三二―六八二）の『般若心経幽賛』の三性説を検討する。『般若心経幽賛』の成立時期も不明であるが、やはり『大般若経』への言及があることから龍朔三年（六六三）を上限とし、基の卒年である永淳元年（六八三年）を下限とする。その空に対する注釈は、次のようである。

此中「空」言、即三無性。謂計所執、本体非有、相無自性。所以称空。諸依他起、色如聚沫、受喻浮泡、想同陽焰、行類芭蕉、識猶幻事、無如所執、自然生性。故亦名空。円成実性、因観所執空無方証。或無如彼所執真性。故真勝義亦名為空。拋実三性、非空非不空。对破有執総密説空、非後二性都無名空。説「一切空」、是仏密意。於有及無、総説空故。

此の中の「空」の言は、即ち三無性なり。謂く計所執、本体は非有にして、相無自性なり。所以に空と称す。諸もろの依他起は、色は聚沫の如く、受は浮泡に喩へ、想は陽焰に同じく、行は芭蕉に類し、識は猶ほ幻事のごとく、所執するが如きは無く、自然生性なり。故に亦た空と名づく。円成実性は、所執は空無なりと観するに因りて方に証す。或いは彼の所執の真性の如き無し。故に真の勝義も亦た名づけて空と為す。実に抛らば三性は、空

に非ず不空に非ざるなり。有執を対破して総密に空を説かば、後の二性の都て無きを空と名づくるに非ず。「一切空」と説くは、是れ仏の密意なり。有と及び無とに於て、総じて空を説くが故に。

ここでは、空が三性三無性によつて解釈されている。すなわち、遍計所執性は相無自性であるから空、依他起性は生無自性であるから空、円成実性は勝義無性であるから空である、という。円測は三性説によつて空を解釈しているが、基はこれに三無性説を加えて解釈している。ここには両者の違いがある。

続いて、真実には三性は空でもなく、有でもない。仏は有執を破るといふ意図から「一切法は空である」と説いたのであり、依他起性と円成実性が全くないことを「空」というわけではない、という。ここには、遍計所執性は捨遣されるが依他起性・円成実性は捨遣されないという、二分依他の三性説が説かれている。これはそのまま撰論学派の境識俱泯の三性説に対する批判ともなっている。この点は円測の注釈と同じである。続く注釈は次のようである。

又此「空」者、即真如理。性非空有、因空所顯、遮執為有。故仮名空。愚夫不知、執五蘊等定離真有、起相分別。

今推帰本、体即真如。事離於理無別性故。由此経言。「一切有情皆如来藏」、「一切法等皆即真如」。説有相事則無

相空、令諸有情断諸相縛²⁶。

又た此の「空」は、即ち真如の理なり。性は空にも有にも非ざるも、空に因りて顯はるる所なれば、執して有と為すを遮す。故に仮に空と名づく。愚夫は知らず、五蘊等は定めて真を離れて有なりと執し、相を起こして分別す。今推して本に帰すれば、体は即ち真如なり。事は理を離れて別の性無きが故に。此れに由りて経に言ふ。「一切有情は皆な如来藏なり」、「一切法等は皆な即ち真如なり」と。有相の事は則ち無相の空なりと説き、諸もろの有情をして諸もろの相縛を断ぜしむ。

すなわち、「空」は真如の理でもある。法性は空でもなく有でもないが、空によつて現われるものであり、空によつて有執から離れることができる。故に真如を仮に空というのである。愚夫は五蘊が真如を離れて有ると執して法相を分別するが、事（五蘊）は理（空）を離れて別の性があるわけではない。このことから、経に「一切有情にみな如来藏がある」「一切法はみな真如である」と説かれている。しかし、有相の事（五蘊）は無相の空（理）であると説かれるのは、有情に相縛（有相）に対する執着を断じさせようとしてのことである、という。

ここには、空は真如そのものではなく、空によつて真如が現われるとする、二空所顯の真如が説かれている。これを非

空非有の中道によって説明する点は、円測の『解深密経疏』の注釈と同じである。また、また一切有情や一切法がそのまま如来蔵や真如であるというわけではないという主張は、法相と法性を峻別する唯識学派の思想であり、両者を直接結びつける如来蔵思想を批判するものである。これが、慧浄の『般若心経疏』における第八識の体を如来蔵とする解釈や、撰論学派の如来蔵思想による唯識説の解釈と、相容れないことは明らかである。この撰論学派の解釈を批判する姿勢も、円測の注釈と共通しているといえる。

このことから、基の『般若心経幽賛』に見られる空の解釈の目的は、玄奘所伝の三性三無性説による解釈を顕示して、慧浄の『般若心経疏』に見られるような撰論学派の三性説による解釈を否定することにあつたと推測される。基の所説は、三無性説に言及する点を除いては、円測の所説と矛盾するところはない。このことは、円測の『般若心経賛』の空の解釈の目的も基と同様であることを示唆している。

結語

以上、中国唯識における『般若心経』の空の解釈をめぐる、慧浄の『般若心経疏』、円測の『般若心経賛』、基の『般若心経幽賛』の三性説を比較して考察した。そこで明らかとなっ

たことは、次の通りである。

一、中国唯識では、『般若心経』の空を三性説によって解釈した。撰論学派では境識俱泯の三性説が流行したが、唯識学派では二分依他の三性説を正義とした。

二、慧浄の『般若心経疏』の空の解釈には、撰論学派の境識俱泯の三性説が見受けられる。円成実性は捨遣されず、第八識ないし如来蔵に比定される。

三、円測の『般若心経賛』の空の解釈には、清弁の遍計所執性・依他起性を捨遣する三性説や、護法の遍計所執性のみを捨遣する三性説が説かれている。前者は撰論学派の境識俱泯説と同じ構造であり、後者は唯識学派の二分依他説である。円測は後者を支持している。

四、基の『般若心経幽賛』の空の解釈には、三無性説が用いられている。また、二分依他の三性説が述べられ、如来蔵思想に対する批判が見られる。

このことから、円測の三性説の解釈は、撰論学派の三性説とは相容れず、唯識学派の三性説と共通することが知られる。これは中国唯識における円測の立場を端的に示すものといえるであろう。清弁と護法、真諦と玄奘を対比する叙述は、たんに結論としての正義のみを主張するのではなく、異義が生じた経緯や理由を明示するために円測が選んだ方法なのではなからうか。それは、初め撰論学派に学び、後に唯識学派に

転じた円測ならではの叙述であり、その著作の特徴とみるべきである。

註

- (1) 撰論学派・唯識学派という称呼については、吉村誠『中国唯識思想史研究——玄奘と唯識学派——』(大蔵出版、二〇一三年) 総論第二章「中国唯識諸学派の称呼」参照。
- (2) 円測は玄奘所伝の五姓各別説を否定して真諦訳に依拠した一切皆成論者であるとする見解については、羽溪了諦『唯識宗の異派』(『宗教研究』一一・三・四、一九一六—一九一七年)、深浦正文『唯識学研究』上巻教史編(永田文昌堂、一九五四年) 二五九頁以下、根無一力『一乘仏性究竟論の撰述と時代的背景』(『叡山学院研究紀要』九、一九八六年) 等参照。
- (3) 円測が五姓各別説を立場として玄奘訳とその思想に忠実であったことは、複数の学者によつて指摘されている。吉田道興『西明寺円測の教学』(『印度学仏教学研究』二五—一、一九七六年)、木村邦和『真諦三蔵の学説に対する西明寺円測の評価——解深密経疏の場合——』(『印度学仏教学研究』三〇—一、一九八一年)、同『西明寺円測における真諦三蔵所伝の学説に対する評価』(『長岡短期大学研究紀要』五・六、一九八二年)、吉津宜英『華嚴一乘思想の研究』(大東出版社、一九九二年) 三〇二頁以下、橋川智昭『円測における五姓各別の肯定について——円測思想に対する皆成的解釈の再検討——』(『仏教学』四〇、一九九九年) 他、同氏の一連の論文を参照。円測の評価の変遷については、橋川智昭『新羅唯識の研究状況について』(『韓国仏教学 SEMINAR』八、二〇〇〇年) に適切にまとめられている。
- (4) 吉村前掲書、第二篇第一章Ⅰ「唯識学派における三転法輪説の解釈」、同第二章Ⅱ「唯識学派における「一乗」の解釈」、同第三章Ⅰ「唯識学派の五姓各別説」、同Ⅱ「唯識学派の理行二仏性説」参照。
- (5) 『開元釈教録』巻八、大正五五、五五五c。
- (6) 慧浄の『般若心経疏』は敦煌本に複数存在し、内容に異同がある。解題・翻刻等については、福井文雅『般若心経の総合的研究——歴史・社会・資料——』(春秋社、二〇〇〇年) 三六三—四二八頁参照。本稿では統蔵所収のものを用いる。
- (7) 慧浄の伝記については、『統高僧伝』巻三智浄伝(大正五〇、四四一c—四四六b) 参照。
- (8) 『般若心経疏』新纂統蔵二六、五九三b。
- (9) 『般若心経疏』新纂統蔵二六、五九三b—c。
- (10) 『般若心経疏』新纂統蔵二六、五九一c。
- (11) これらの解釈は、慧浄の『般若心経疏』の随所に見られる。「虚境俱泯、不同俗諦故」(同五九五a)、「心境兩亡。名為涅槃」(同五九七a)、「人法兩空、心境双絶」(同五九七c)。

(12) 『般若心経疏』 新纂統蔵二、二六、五九四c—五九五a。

(13) 吉村前掲書、第一篇第四章「撰論学派の三性三無性説」参照。

(14) 『般若心経賛』 大正三三、五四四a。

(15) 『仏地経』 大正一六、七二三a—b。『仏地経論』 卷四、大正二六、三〇七a。

(16) 『般若心経賛』 大正三三、五四四a—b。

(17) 『般若心経賛』 大正三三、五四四b—c。

(18) 『解深密経』 卷四、新纂統蔵二、二五四b—c。同卷五、同二九四a。『仁王経疏』 卷上本、大正三三、三六〇b。三性のすべてを捨遣する解釈が真諦の所説として撰論学派で流行したことについては、吉村前掲書、第一篇第四章「撰論学派の三性三無性説」一四五—一四六頁、第二篇第一章Ⅱ「唯識学派における三転法輪説」二六九—二七一頁参照。

(19) 二分依他說は、『成唯識論』 卷八の「依他衆縁而得起故。頌言分別縁所生者、応知且説染分依他。淨分依他亦円成故。或諸染淨心所法皆名分別。能縁慮故。是則一切染淨依他、皆是此中依他起撰」(大正三一、四六b)を典拠とする。基の『成唯識論述記』 卷九本(大正四三、五四五a)によれば、これは護法の正説であるという。

(20) 『仁王経疏』 卷上本、大正三三、三六〇b—三六一a。

(21) 『仁王経疏』 卷上本、大正三三、三六〇c—三六一a。

(22) 『解深密経疏』 卷四、新纂統蔵二、二五七c。

中国唯識における円測の位相(吉村)

(23) 『解深密経疏』 卷四、新纂統蔵二、二六五a—b。吉村前掲書、第一篇第四章「撰論学派の三性三無性説」一五四頁参照。

(24) 円測の『般若心経賛』では、『解深密経疏』のように護法の解釈に対する積極的な支持が示されているわけではない。それは、『般若心経』が唯識の三転法輪説における第二法輪、すなわちA清弁の空が説かれるものであり、B護法の非空非有中道が説かれるものではないと考えられているからであろう。『般若心経』が第二法輪に属することは、『般若心経賛』に「為已入者迴趣大乘、鸞峰山等十六會中、説諸般若。此是第二無相法輪」(大正三三、五四三a)とあることから知ることができる。これに対し、『解深密経』は第三法輪に属することから、「第三蓮華蔵等淨穢土中、説深密等了義大乘、具顯空有兩種道理、双除有無二種偏執」(同上)と述べられている。

(25) 『般若心経幽賛』 卷下、大正三三、五三五b—c。

(26) 『般若心経幽賛』 卷下、大正三三、五三五c。

(27) 円測と基の解釈は、細部においては種々の違いがある。その違いは唯識学派の内部における解釈の違いであり、撰論学派との違いに比べれば大同小異である。